

# 与謝野晶子『明るみへ』論

——大正期晶子の出発——

田 口 道 昭

—

大正二年（一九一三）六月五日から同年九月十七日にかけて、与謝野晶子は「東京朝日新聞」に小説「明るみへ」を発表している。百回の連載で「前編終り」とあるが、後編は書き継がれなかった。後、大正五年一月に金尾文淵堂より単行本として刊行されている。単行本収録にあたっては連載第八十九回までを二十一章に編成、残りの十一回を削除した。晶子の小説の中ではほとんど唯一の長編小説である。

この小説は、晶子の自伝的作品で、明治四十四年春の与謝野家を舞台として始まり、寛が同年十一月に渡欧の旅に出るまでのいきさつを、寛、晶子の葛藤を中心に、新詩社同人たちをはじめ、夫婦をとりまく人々の動向を絡ませながら描いたものである。そして、晶子が寛の後を追って渡欧を決意するところで作品世界は終わる。

当時の反響は微々たるもので、生方敏郎の『「明るみへ」は朝日へ連載して不評に終ったが、事実を細かく間違へずに書いてある點は此光彩ある天才者の自叙伝の一部としてならば面白く見られるであらう』（『女流作家の群』『文章世界』大3・1・1）などといった批評が目につく程度である。吉屋信子の「十七歳の文学少女の私はついに生意氣千万にも『晶子先生は小説なんて書かなければいいのに……』と悲しかった」（『私の見た人』『朝日新聞』昭38・2・5）15、3・19（7・6）という回想もある。

小説家としての与謝野晶子は五十余編もの作品を残しているが、それらの作品に対する当時の評価は褒貶相半ばしている。生方は「小説は大層出来不出来のある人だが、要するにその和歌や随筆と較べ物にはならぬ」（前掲）と述べているが、晶子の小説はおおむねそのように受け止められていた。<sup>（注1）</sup>また、自伝的作品の多いのも特徴で、むしろそういった関心から読まれてきたといつてよい。そして、この「明るみへ」はその代表作とでもいうべき作品である。例えば、与謝野夫妻の末娘森藤子は『みだれ髪―母・与謝野晶子の全生涯を追想して』（ルック社、昭42・9）で、明治四十四、五年の晶子、寛の記述を「明るみへ」の拠っているし、晶子の評伝に関するものは多かれ少なかれこうした関心から「明るみへ」に言及している。

しかし、この作品ははたして「自叙伝の一部として」のみでしか評価できない作品なのだろうか。稲垣達郎氏は、この作品について、「情熱の短歌とは別に、具体的な状況のなかから多少とも客観的にとらえられ、えがかれているところをよしとするのである。大正期小説の一收穫とみてもよからう」（『晶子の小説』『定本与謝野晶子全集』第8巻月報 昭56・12）と述べているが、晶子がそれまでの自分自身を客観的にふりかえり、大正期の文学活動への跳躍点としていった点にこの作品の意味はあるように思う。

晶子が寛の後を追って巴里へ旅立ったのは、明治四十五年五月のこと、約半年間の外遊を経て单身帰国する。「明るみへ」の執筆はその半年後のことである。その執筆事情にかかわって、大正二年五月二十四日付の小林政治宛書簡のなかで、晶子は「朝日新聞に前借いたしおき候ひし金子すなはち小説稿料に候　そのためどうしても六月一日よりけいさいのものかき申さねばならぬことになり今日より執筆いたし候」と書いている。朝日からの前借りとは渡欧費用のための借金であり、その返済のための小説執筆だというのである。しかし、そうした外的要因の有無にかかわらず、「明るみへ」のモチーフは渡欧後の晶子の中に醸成されていたように思う。それは、一つには夫与謝野寛と晶子自身の関係の見直しということであり、もう一つは、欧州体験を経て新しい思想を形成しつつあった晶子自身の変化である。そしてこれらは夫と外遊体験を共にしたという点で無関係ではない。こうした点において、晶子の思想を外遊以前と以後とを分かつという意味でもこの作品は重要な位置を占めている。

## 二

作品世界はほぼ時間的経過に従って展開しているが、明確な構成意識を読み取ることが出来ない。むしろ、長編小説であるにもかかわらず、「長編としての構成を持たない長編小説」（福田清人・浜田弘子『与謝野晶子』昭43・3）で、散漫な印象を受けるのである。

小説世界は明治四十四年の春頃から舞台である。「新月」（明星）がモデル）終刊後、無聊をかこつ八阪透（与謝野寛）と京子（晶子）との葛藤から書き起こされ《1》2、新聞の連載回、以下同》そんな透を仏蘭西へ留学させ

ようと京子は、妹の春子（志知里）に手紙を書き送ったり《6ゝ8》、書店の主人である小沢（金尾種次郎）に相談したりする《9ゝ13》。しかし、それに水を差すような透の電報が届く。渡欧の費用を都合してくれたのは透の前妻でなかったかと、京子が猜疑の心を抱く《16》。そうした夫婦間の相剋と葛藤を基調として前半部分は展開される。その間に「新月」の同人である川崎（江南文三）の婚姻をめぐるエピソードが挟まれ《3ゝ5》、また、財部謹一（堀口大学）の見送りに同人ないし元同人らが集ったりする《19ゝ23》。さらに、三人の子供たちのこと《17ゝ18》、長男篤（光）の病気のこと《24ゝ28》、夫妻の文学仲間でパトロンの存在である田村（小林政治）への訪問《32ゝ35》、「新月」の仲間で、真鍋（茅野蕭々）の妻となっている久子（茅野雅子）への手紙《36ゝ38》などが描かれている。そして、この前半の山場といえるべき場面が、京子が夫に対して長い間抱いていた嫉妬の情を吐き出す場面《39ゝ41》である。ここにおいて京子の疑惑が解消され、作品は後半部分へと続いて行く。後半部分の中心となるものは渡欧に旅立つ透の見送りであるが、透の渡欧中に住む家を探す場面《42ゝ49》、出立前の透や子供たちを描いた場面《50ゝ52》が間にはいる。京子は横浜で透を見送るのだが、別れがたく関西までついていくことにする《53ゝ60》。関西では透の送別会が開かれる。関西に着いてからは、真鍋夫妻をはじめ、お徳や三本木のおかみなど透や京子の過去にまつわる様々な人物が登場する。いよいよ透が欧州に向けて出航した後《75・76》、京子は九年ぶりに故郷を訪れる《79ゝ83》。そして、単行本では、京子からの真鍋宛の手紙《86ゝ89》で作品世界は幕を閉じる。新聞の連載では、さらに、子供たちに聞かせる京子の「お話し」《91ゝ93》や、透への手紙《94・95》、吉村（森田草平）と朋子（平塚明子）をめぐる話《96ゝ97》、京子の巴里行き相談《98ゝ100》などが続き、（前編終わり）と記されることになる。

作品の山場といえる場面はやはり、前半の京子が透に嫉妬の情を吐露する場面であり、単行本の締めくくりに置かれる真鍋宛の手紙も、京子が従来の自分と透との関係の見直しを語るところに中心点がある。しかし、この間にも本筋にあまりかわらないエピソード的部分(借家探し、実家への来訪など)があるほか、「小説の中の『橋』の部分」(大岡昇平<sup>(注2)</sup>)が多いことが、この作品を冗漫なものにさせている。しかし、そうした小説方法上の欠陥を除いたところにみえてくるものは何か。作品の中心となる点について以下みておきたい。

作品は、冒頭、「新月」終刊後の失意の透を描き出す。「面会お断り 廃兵殿、訪問記者殿、行商者殿、空談家殿、揮毫依頼者殿、其他特別の御用なき諸君、今後の生涯を愛重すべき厳肅なる自覚に由り、右諸君の御諒察を乞ひ候」という文章を板に書いて、玄関へ下げておこうと透は言い、京子を苦笑させる。そんな透に京子は、「けれどね、あなたは外から空談家が来ないと淋しくなりますわ、きつと」と言う。透は、「さうかね。僕は遊んで居るからね」と言い、ふてくされたように、その原稿を破って、屑籠に入れる。そんな透を立ち直らせたく思い、京子は「良人も洋行が出来たら嬉しいだろう」と想像する。京子と透のそうした日常生活は妹春子への手紙の中にも綴られる。何もすることのない透はダリヤの根元にある穴より出てくる蟻を錆包丁でたたきまわす。「あなた、また蟻なんですか」という言葉に、透は「憎いからね」と答える。

春子へ手紙を書いたのは、夫の渡欧費の援助を願うことが理由であった。透の洋行を具体的なものにするために京子は手を尽くそうとするのである。また、京子は、書店の経営者である小沢に相談に行こうともしていた。しかし、そんな京子のことを、透は決してよく思っていない。「私ね、あなたのことで行くのですよ。頼みに行くの。」という

言葉に透は、「ふうん。そんなことならおよしよ。」と答える。透を外遊させるという計画は京子の歌を書いた屏風を買ってもらうことでお金を作るということにまとまる。ところが、夫の外遊に力を尽くす京子に水を差すような手紙が、九州に旅行に行っていた透から届けられる。

洋行費の三千圓は此地にて思ひ掛なく調達さるゝことゝ相成り候。されば此事に附きての君の苦心はもはや要なしと思召し下されたく候。

この手紙を見て、『新月』を廃刊してから三年越し不機嫌な顔ばかり見せられて居ても、まだこれ程良人に反感を起すことはなかった」京子は、先妻である貞野（林滝野）から夫が援助を受けたのではないかという疑惑に悩むことになるのである。

ところで、これらの記述はどこまで事実在即したものであったであろうか。先に述べたように森藤子の著書は、明治四十四、五年の晶子、寛の記述を「明るみへ」に拠っているし、「明るみへ」を晶子、寛の伝記的な事実として受け取る見方は少なくない。しかし、実際には、七瀬八峰ら双子が寿満子一人とされていることや四十四年二月に出生した宇智子が作品の中には出て来ないこと、徳山が福岡にされていることなど明らかに虚構とみなされる事のほかに、実際の事実と小説世界の出来事には微妙な食い違いがある。そこに晶子自身の事実の選択の目と、この間の寛と晶子の相剋の実態をうかがうことが出来るのではないか。

ここで注目したいのは、洋行費の心配には及ばないという透の電報が打たれた時期である。小説世界では、春子宛の手紙（五月二十九日付）や小沢との相談（春子への手紙から半月後）以降であり、財部謹一の見送りの間（そのモ

デルの堀口大学の出航は七月三日）であるから、およそ六月中旬頃のこととなる。しかし、寛が渡欧費用の金策に出掛けたのはこれがはじめてではない。また、はたしてこの時期に寛が徳山に行ったかどうかという事実も現在のところ確認できない。<sup>(注3)</sup> 彼らが小説の展開の上での日付だとして、寛の五月二十九日付小林政治宛の書簡には「渡欧の費用もほゞまとまり申候」とあることから、六月ではなく、五月頃に寛の徳山行きが想定されるかもしれない。<sup>(注4)</sup> しかし、この五月には千葉方面へ文芸講演会に出かけているほか（六〇七日）、新詩社の短歌会を十四日に開いて晶子、寛とも出席している。二十九日の書簡には、渡欧費用の内訳として、寛の三人の兄、明治書院、大倉書店、紀伊の大畑氏、そして小林政治の名を挙げているが、これら計二千七百円金策が先の日程の合間になされたとは考えにくい。また、関西・中国方面での金策がなされたとするならば、改めて小林政治に向かって渡欧費用が整ったことを報告するものもおかしい。京都に立ち寄ったならば、小林のいる大阪に行かない筈はほとんどありえないからである。しかし、この年の一月に寛が徳山をはじめ関西方面を訪れたことは事実である。一月七日小林政治宛の手紙に「十九日に東京を發し廿一日に徳山へ着の事に定まり候」、「二月一日頃上坂し」云々とあるように、寛は一月下旬から中国地方へ出かけている。石川啄木の一月二十五日付けの日記には「与謝野氏を訪ねたが、旅行で不在、奥さんに逢つて九時迄話した。与謝野氏は年内に仏蘭西へ行くことを企てゝあるといふ」とあり、徳山行きは渡欧のための金策が目的であったのではないかということをはかせる。そして、三月号の「スバル」の消息欄に「与謝野寛氏は中国から歸つた」とあるから、寛の帰京は二月中であつたこと、二十二日に四女宇智子が生まれているが、この出産の時点には既に寛がいたことは「産褥の記」（初出「産褥の雑感」）「女学世界」明44・4『一隅より』所収）にも明らかであり、さらに、当時の晶子の歌に、

旅に居て心うごくはとがなしとわれや云ひつる君やおもひし

十歳の子が旅の弟おもふことわが君恋ふるさまにほゞ似る

(東京毎日新聞、明44・2・7)

とあり、おそらく二月の中旬までには寛は中国、関西地方から帰って来たのであろう。いずれにしても、一週間程度の旅ではなかった。五月二十九日の手紙は金策のその後の経過を知らせたものではないか。

そうだとするならば、「明るみへ」に描かれた透の福岡行きは実際には一月下旬以降のことが背景とされているのではないか。いずれにせよ、作品世界で京子が透のために渡欧費用を捻出しようと努めるまえに、実際には寛自身、渡欧費用を都合しようとしていたこと、晶子がそれを知らないわけではなかったことに注意したい。

ところで、百首屏風の企画は四月のこと(小説では六月)、「スバル」五月号の「消息」欄にそのことが記され、申し込み期限は六月十五日までとある。ただし、その目的は記されていない。そして、実際に案内状を出したのは七月から八月にかけてのことである。<sup>(注5)</sup>その案内状には「良人の欧州遊学の資を補ひ候ため」百首屏風の応募募るとある。

しかし、ここでも、寛と晶子との食い違いが見られる。先の寛書簡には「小生と一緒に若し出来る事ならば荆妻も渡欧致したき希望有之候へども右の資金の路無之候故、近日試みに荆妻の歌を百首自書せし二枚折金屏風(甲種百円、乙種五十円)歌を大書せし半折軸物を或る数を限り応募者へ勧誘状を出す計画有之候」と、晶子の渡欧費用のために百首屏風を募るとされているのである。しかし、晶子が渡欧を決意したのは寛がいなくなつてのちのことであり、この食い違いは肩身の狭い思いを避けようとした寛が、百首屏風作製は寛のためではなく晶子のためのだと世間に思わせようとし、自分もそう考えようとしたのではないかという山本藤枝氏の指摘もある。<sup>(注6)</sup>



ここでは、寛自身が渡欧資金の調達のために動いていたこと、しかもそれが小説の時間よりも早くなされていたことに注目したい。こうした事実から、晶子の小説における事実の選択と再構成がどのようになされていたかがわかる。つまり、失意の透を何とか立ち直らせようとする京子が、春子に無心したり、小沢と相談して百首屏風の頒布を計画しているのに対して、そうした京子の気遣いを否定するかのような透の行動（九州行き）であったこと、そしてさらにそこに前妻の影がちらつき、京子が嫉妬に苦しめられるという設定である。『明るみへ』という作品は、単に失意の透を渡欧にやり、「明るみへ」向かって行くという作品ではなく、京子自身がとらわれていたものを克服して、やがて京子自身も渡欧を決意するというテーマを含んでいるのである。そして、京子がとらわれているものとは、京子の透との関係のありようであり、透をめぐる嫉妬の感情であり、「灰色の恋の世界」（後述）であった。

前妻への嫉妬に懊悩する晶子の姿は、明治四十二年四月に発表された「親子」（「趣味」）や、「初産」（「読売新聞」明42・4・16（20））にも描かれている。「初産」には「初子は初め親の愛の総てを受ける。弟妹が出来ても親の愛の半は初子の上にある。自分の愛の総てを受ける子は一方で芳之助（寛―引用者）の愛の欠片を貰ふのに過ぎないのかも知れぬ」と悩むお浜（晶子）の気持ちを中心に描いたものであるが、「明るみへ」では、篤（光）の病気を心配する京子が、「透が九州へ行ってからは、我子に対する良人の愛が悉く虚偽ではないかと思ふやうな事があったり、透が久し振で福岡の明を見て来た時から自分の子は父に咀はれて居るのに違ひないなど、思ったり、さうかと思ふとまた明（寛と林滝野の子、萃）に逢はないで帰つたとすれば、良人はそれについての煩悶を自分の知らない時にしたのであらうと思つたり、厭な気持ちに」なったりしたと記述される。

そして、寛の六月の徳山行きはあったかどうかは別に、この間に先の見た夫婦間の葛藤がこの時期噴出したのでは

ないかということは、晶子の次のような歌にうかがわれる。

死ぬばかり妬しいく人君恋ふにあやしまざりし日もありしかど

しどけなくあさましがりぬ動きなく恋ふるおのれに似ぬを憎めば

ひと筋にわが子を祈りいたづらに君を恨むもみな弱きため

(二六新聞、明44・6・17)

(東京日日新聞、明44・6・18)

そしてさらに、京子の嫉妬は、透渡欧後に借りる家捜しの際に噴出する。「母様の心持が分らないことがあるものか、母様と僕は恋人同士ぢやないか」という透の言葉に、京子は「私があなたの恋人だつて、そんなことがあるものですか。あなたは広江貞野さんばかり思つて人ぢやありませんか」と言い、そのまま発作を起こして倒れてしまふ。この場面は『明るみへ』の中で一つの大きな山場をなしている。そして透の「広江貞野と云ふ女は小説家の佐村金波と一緒になつてもう子供を四人も産んで居るんだよ」、「そんな女を僕が思つて居るなんか、何故そんな残酷な事を母様は云ふの」という言葉にやがて京子は、自分の中のわだかまりを溶かしていくのである。

何と云ふ驚くべき事を聞くのであらうと思ふのと、嬉しい事である、良人の心には外の女の影は射して居なかつたのであると思ふのと、この二つの意識は京子の心に続いて起つたのでなく、大分間があつてから第二の事は思つたのである。今日になつて突然に自分の口から云ひ出させて、近い日に遠い処へ行かうとする良人から事実を明かにさせたのは、目に見えない神秘なものの力のやうにも京子は思つた。

しかし、このわだかまりの解消はいかにも唐突な感じである。以下、家探しの場面、透を追って、関西を訪れる場

面へと作品は展開していくが、透と京子との葛藤はもはや表面には作品にあらわれてこない。透の欧州行きによって取り残される京子の寂しさが描かれるのみである。こうしたところに、作品の構成上の不備、テーマの不統一、拡散がみられるのであるが、それは、より深い所では晶子が自分たち夫婦のありようを形象化しきれていない弱さを示しているといえよう。そして、透と京子との関係の見直し、及び京子の生き方の見直しは作品の終わり近く真鍋に当たった「手紙」というかたちで語られることになるのである。その点を論ずる前に「明るみへ」という作品のもう一つの側面をみておきたい。

### 三

「明るみへ」がモデル小説であることはつとに論じられてきたことである。「明るみへ」という作品は一面、寛、晶子を取りまく新詩社周辺の人々の歴史を綴ったものである。この点に関して、次のような評価がある。

多種多様なモデルの登場は、『明るみへ』をいわゆる「家庭の事情小説」の域から引きあげるとともに、「文学史的な興味をそそる」作品にしている。けれども、それは同時にこの作品のひとつの大きな欠陥でもある。晶子はここで身辺に出没する人々を忠実に記録しようとするあまり、実に多くの人々を登場させ平板に並べすぎている。そのため個々の登場人物の印象はきわめて希薄なものとなり、実体をそなえた人間像としては浮かびあがってこない。

（福田清人・浜名弘子、前掲書）

しかし、中心となる人物はそれほど多いわけではない。この作品で透、京子以外によく登場するのは、川崎（江南

文三)、小沢(金尾種次郎)、財部謹一(堀口大学)、田村(小林政治)、真鍋(茅野蕭々)、真鍋久子(茅野雅子)といったところではないだろうか。そして、それぞれの人物がいかにして、透や京子とかかわっていたのかは、作品の中でそれなりに語られているのである。<sup>(注十)</sup>例えば、田村について。

田村の年は透と京子の間位である。堺の菓子屋の子の京子が歌を作り初めた頃、田村は大阪の雜貨商の手代で、羽織が許されたか許されぬか位であつた。中学の五年の時に父親に死なれた田村は実業家になつて母と二人の弟を養はうとする素地をさうして作つて居たのである。一方では文学が好きで短篇小説などによく筆を取つた。片手間に「みをつくし」と云ふ雑誌を十五六人で出したりもした。京子もその同人の一人だつたのである。

これを読むと、寛、晶子と同世代の文学青年たちが、当時いかにして文学にかかわっていたか、そして、寛や晶子がある中でどのような位置にいたのかがわかる。晶子がここで書くとしたことは、単なる身辺の記録ではなく、晶子自身が生きた時代を「明星」とそれを取りまく人々を中心にとらえかえそうとする試みであつた。それは、右のように、登場人物を通して、お互いの過去を綴るという「方法」にあらわれているのである。

京子の前を横山が通り、須山が通り、中村が通つた。京子はそのような人達を眺めて、其人等は青年の間に多くの崇拜者を持つた謂ゆる花形の人が多いが、皆一度は新月社に籍を置いて居た、それが一人づゝ或は四五人も袂を連ねて透の傍を去つて行くのを見た時、透はどんなに淋しい思ひをしたか知れない、或時にはそんな場合の良人を慰めて、新月社はつまりあなたと自分の二人になると思つて居ればいゝなどゝ云つたことがあつた。自分よりは立派な鳥の雛なのだから斯うなるのが自然なんだよなどゝよく透は云つたが、昔の雛が皆美しい翅を振つて、今日も残つて居る新月社の人達と交つてかうして門出を送つてくれるのを良人は嬉しく思つて居るに違ひないなどゝ京子は思

った。

横浜での透の見送りの場面、京子はこのような感慨を抱く。それは、『明星』という明治三十年代に大きな位置を占め、四十年代後半に衰退していった文学の流れ、そしていまた大正期を迎えようとするこの流れの中に自分たちの位置を探る試みではなかったか。多くのモデルのある人物の登場は、確かに、わずらわしさと、モデル小説から来る興味を払拭出来ないような読みをもたらすが、京子と透の葛藤が、単に「家庭事情」にあるものとしてではなく、文学や歴史の流れとそこに生きる人々を背景として、浮かび上がらせるような仕組みを持っており、ここにそれまでの晶子の自伝的小説と異なる大きな特徴がある。

ところで、欧州体験後、晶子の本格的な評論活動が始まるのであるが、そのメルクマールとなるのが「太陽」誌上での評論随筆の掲載（大4・1）<sup>（注）</sup>である。その中に次のような文章がある。

私は二十歳過ぎまで旧い家庭の陰鬱と窮屈とを極めた空気の中にいびけながら育った。私は昼の間は店先と奥とを一人で掛け持つて家事を見て居た。夜間の僅かな時間を偷んで父母の目を避けながら私の読んだ書物は、いろいろな空想の世界のあることを教へて私を慰め且つ励ましてくれた。私は次第に書物の中にある空想の世界に満足して居られなくなつた。私は専ら自由な個人となることを願ふやうになつた。そして不思議な偶然の機会から殆ど命掛けの勇氣を出して恋愛の自由を贏ち得たと同時に、久しく私の個性を監禁して居た旧式な家庭の檻からも脱することが出来た。また同時に私は奇蹟のやうに私の言葉で私の思想を歌ふことが出来た。私は一挙して恋愛と倫理と芸術との三重の自由を得た。それは既に十余年前の事実である。

〔鏡心燈語〕「太陽」大4・1

ここで晶子は、「明星」の流れに身を投じ、寛といっしよになった時点のことを「恋愛と倫理と芸術の三重の自由」

という言葉で表現している。おそらく十余年前の当時にはこのようには意識してはいなかった。これは、欧州体験後の時期の晶子の考え方からなされた意味付けなのである。そして、こうした思想は「明るみへ」を描いた晶子の姿勢と同じものではなかったか。この文章にはさらに次のように書かれている。

私は近年欧州へ旅行するまでは、日本と云ふ世界の片隅に居て世界に慣れて居る一人の世界の浮浪者であつた。

日本よりも世界の方がより多くなつかしかった。然るに欧州の旅行中、到る処で私一人が日本の女を代表して居るやうな待遇を受けるに及んで、最も謙虚な意味で私は世界の広場に居る一人の日本の女であることをしみじみと嬉しく思った。私の心は世界から日本へ帰つて来た。私は世界に国する中で私自身に取つて最も日本の愛すべきことを知つた。私自身を愛する以上は私と私の同民族の住んで居る日本を愛せずに居られないことを知つた。そして日本を愛する心と世界を愛する心との抵触しないことを私の内に経験した。

「明るみへ」には非常に多くの人物たちが登場しているが、そのことは、当時の「一人の日本の女」としては、晶子の交際がいかに広がったかの証左となるものである。「旧式の家庭の檻」から抜け出して「自由な個人」として歩み来った経緯、さらに「世界の広場に居る一人の日本の女」と自覚するにいたつたその成り行きを描こうとしたのがこの「明るみへ」という作品の一つの構想ではなかっただろうか。<sup>(注9)</sup>

#### 四

透を見送ったあと、故郷の堺に寄って、帰京した後、京子は真鍋（茅野蕭々）に手紙を送る。この茅野蕭々・雅子

がモデルである真鍋夫妻もまた、透・京子の夫婦の歴史を彩る人物であった。真鍋がまだ高等学校の生徒だった時、透は京子に冷たかった。真鍋は透の入院先から帰る途中の京子を、四つの簍を背負いながら、千駄ヶ谷まで送ってくれたことがある。また、真鍋の妻である久子に対して、透が誰のところへも嫁がせようとしなかったというエピソードなども作品中に紹介されている。

京子の手紙は、関西から家に帰ってきてから二時間後に受け取ったという真鍋の手紙に次のように答える。

私を見て、恋する人は永久に灰色な物だとお感じになったさうですが、私自身はさうでもない気がすると云ひたく思ひますのはどうした事なんでせう。

真鍋の手紙は作品中には紹介されていない。そのことは作品世界の経緯を不明瞭にしていることの一つなのだが、実は、この茅野蕭々の手紙を晶子は「日記のうち」(『早稲田文学』明45・1)で紹介している。手紙はまず、茅野が難波の停車場まで行ったものの既に晶子の乗った電車が出て行ってしまったこと、見送りに来たのは「今一度奥様の強い方面を見度い、確りして居る処を見たかった」ためだということ述べたあと、次のように述べる。

云ひ度いと思ふやうなことは一言も云ひ得ずに了りました。併し大概わかつて居て下さるでせう。私は私の弱い方面を奥様に見せ度くありませんでした。何かの時には尤も冷静沈着に処理して行くことの出来る男だと思つて居て下さい。私は確かにさう云ふ方面をも持つて居ますがリヒヤルド、デエメルが斯う云つて居ます。「されど恋はTrübeなり」Trübeとは曇ると云ふ意味とうら悲しいと云ふ意味をも持つて居ます。私はそれに「永久に」と附加して置き度い。併し貴女は強い人でせう。

こんな手紙を書いても決して奥様を慰められやうとは思ひません。言葉ではないです。併し私の心でも今のあな

たの心を慰められないでせう。時をたのむより仕方が無いでせう。

「日記のうち」では晶子はこの手紙について何も感想を述べていない。「明るみへ」において初めてその回答を公に述べたことになるのである。<sup>(注10)</sup> 京子は真鍋の言葉を次のように受け止める。

大分久しく眠つて居ましたのね、硬ばりかけたのね、乾いてましたのね、私は。真実にあなたのお言葉通り、褪めて褪めて灰色になった恋を、其と氣附かずに独り空しい永久を頼んで居たのでしたね。(中略) 曾て恋をし初めた日に作つた自分の世界の蜜のやうな空氣に何時しか浸り過ぎて、其れが自分の命を曇らせ、低徊させ、鈍らせて、自然そこに固定するやうな傾向を私が持つやうになつて居ましたのは事実です。(中略) 其主な原因は一度自分の作つた恋の世界を永久の世界だと信じ切つて居たからでした。

しかし、現在抱いて居る氣持ちはそれとは違ふと京子は書く。京子は「良人と別れ別れになつてから一足或国境の外へ踏出した氣がします」と言い、その氣持ちは「其灰色の恋の世界や永久と云ふ時間から少しづつ浮き出すやうに離れて行く氣持」だと述べている。そして、「それがもう恋の世界ではないかも知れ」ず、「私の心は不思議な動揺を覚え出し」たと言ふのである。その「不思議な動揺」について京子は「氣まぐれ」という言葉を使って説明する。

氣まぐれと云ふ言葉は世間から恐らく誤解されるかも知れません。(中略) 何だか羽が生えかけたやうな、躍り出しさうな又悪癖のやうな寒さにも慄へさうな此心持は、道德とか、理智とか、さう云ふ限りのある世界に栖む鳥では無くて、上下左右を琉璃色でぼかした虚空を目がけて羽叩く鳥のやうでもあります。

ここで比喩的に表現されている「氣まぐれ」という言葉はかつて京子と真鍋の間に交わされた言葉だった。

真鍋さん、何時か私が男をその妻から解放して自由な情意の生活に入らせる必要を感じて居ると云ふ様な事を書



いたのを見て、あなたは又京子さんの気まぐれな議論が初まったと仰しやいました。私は其気まぐれをとうとう実行して良人を海外へ旅立たせたのですが、其と同時に私も永らく頼りにして居た良人から離れて、久し振りに十余年の昔の娘ごゝろに還つた氣持で、つくづく自分を反省する時が来たやうです。

ここでいうかつて京子が書いた文章とは、正富汪洋が指摘する<sup>(註1)</sup>通り、『一隅より』(明44・7)に収められた「雜記帳」の中の一文である。「今日の自覚した男子」が「理性に於て絶えず新しい知識を追うて居る如く、感情に於ても次第に新しい情味を求めるのは当然です」、「世の聰明なる妻は皆良人の心に同情し、快く良人をして自由なる情的生活に赴かしめるのが賢い立派な量見でないかと思ひます」とかつて述べた京子―晶子は、そうした考えでもって、透一寛を旅立たせたと云うのである。そして、夫をそのように旅立たせた晶子自身も変わらねばなかつた。

私は旧吾を続けるのが厭になつて、新吾を作り出したいと云ふ平凡な自覚が起こり出したのです。振り返つて見ると、私の命の杯は久しい間同じ酒許りを注いで、新しい酒を日毎に取り代へることを忘れて居ました。今こそ三四年このかたの良人が断えず黙つて苦い顔をして自ら悩んで居た理由が解るやうです。あの人は早く氣が附いてあの人自身の内部の飢餓に悩んで居たのです。そして又あの人が煩さい程の皮肉を云つて度々私に厭な思ひをさせたり、時には語るに足らない者の様な氣振を私に見せたりした理由も漸く今になつて解るやうです。良人は私が恋の永劫を夢みて其れに酔つた儘覺めずに居るのは、どんなにか齒癢くも、憐れにも、愚かしくも思つた事でせふ。私は近い一年間の良人を見て発狂する人ではないかと竊に<sup>ひそか</sup>戦慄して居る時に、良人の心の中では私を見て<sup>いき</sup>氣息のある死人だと悲しんで居たかも知れないと思ひます。

また、ここには透のこれまでの憂悶のとらえなおしがある。このような視点を晶子が持ち得た背景に、寛とともに

した欧州体験がある。寛がパリにおいて、学問的にも芸術的にもその渴望を満たそうとあらゆるものを見聞しようとしていたことは、夫妻の共著『巴里より』（金尾文淵堂、大3・5）に明らかである。一方、晶子は、パリに来た当初、何ということもなしに一カ月が過ぎてしまったという。それは、パリに来たのが「唯だ良人と別れて居ることの堪へ難い為めであつた」という理由でしかないためであつた。「良人が欧州へ来たのとは大分に心持が異ふ」（『巴里にて』『巴里より』所収）と反省する晶子に異国で見る夫は、いかに生き生きとしてみえただろうか。欧州からの帰国後の寛が再び不遇をかこつことになつても、晶子は「併しあの人は詩人です。私はあの人の事が癪に障つてならない時でも、あの人の詩の才を想ふと何もかも一切忘れて、あの人を尊敬したくなります、愛したくなります。世間はあの人を棄てゝ居るでせうが、あの人は決してあの人自身を棄てゝ居ません、じつと自重して居ます。そしてあの人の少数の弟子と私とがあの人の未来に期待して居ます」（『一年草』『東京朝日新聞』大3・11・4（28））と記す所以である。そうした寛をみつめることによって、晶子は今までの自身のありようを見直すこととなつたのである。

私は今砂の上に投げ出されたやうなひとりぼっちになつて居て、寂しさがひしひしと身を噛みます。（中略）真実に自分が自分の味方になることの出来るのは、ひとりぼっちになつた上でなければ出来ないのではないでせうか。一昔前に私は寂しいひとりぼっちの娘であつたればこそ、新しい果実の皮を剥ぐやうに、自分の純な命を開いて真剣に自分の恋を作り出すことが出来ました。私の芸術は命から迸る血の飛沫でした。私が再び経験するひとりぼつちを命を前へのし出して何を新しく掴ませようとするのでせう。私の今覗いて居るのは底のない恐怖のやうにも思はれます。

こうした京子の決意は実は欧州体験後の晶子のものである。晶子の評論にいう。

生活は季節を扱わずに発芽と開花と結実とを続けて行く。新しいことは眞の生活の相である。既に生活が不斷に移つて行く以上、私たちの倫理観もまた不斷に移らねばならない。永久の眞理というものを求めることの愚は琴柱に膠するにひとしい。永久の眞理というような幽霊に信賴して一方のみを凝視している人が、刻々に推移する人生に対して理解もなく判断も出来ず、自分が人生の本流に乗ることを忘れ時代の競争に落伍していながら、かへつて反感と否定とを以て世の澆季を罵つたりするのである。

〔鏡心燈語〕「太陽」大4・1)

この「永久の眞理」に対する考え方と「自分の作つた恋の世界を永久の世界だと信じ切つて居た」という反省とはその発想を同じくするだろう。さらに次のような文章、

其れが何であらうとも、驚いて胸の動悸が少時は止まない様な変化と刺激とが断えず生活の上にあつて欲しい。然うで無ければ自分の顔付までが質素になり、陰になる。単調な生活を続けて居る人の顔が兎角間伸する様に、微弱な刺激ばかりに慣れて居ては、常に心に空虚な感を免れない。慣れると云ふこと、驚くと云ふこと、喜ぶと云ふこと、悲歎すると云ふこと、努力すると云ふこと、斯様に心を動揺させつゝ進んで行く人の顔には上氣して血が熱り、生々とした色に富む。自分は意識して其方へ向はうとあせつてゐる。

全く睦じい夫婦、そんなものが世の中にあらうとは想像も出来ない。如何にいみじい恋愛に由つて結ばれた夫婦でも、折々小波の様に疑惑や嫉妬や不安やが心の上に浮き上る。其れが悲しくもあり、又楽しくもある。斯う云ふ動揺が全く無くなつたら、男女の協同生活と云つても土用の凧の続く長崎の海の様にな愉快なものであらう。又硝子の箱に入れられた京人形の様寂しいものであらう。

〔折々の感想〕初出未詳 『雜記帳』収録)

右の後半部分が「明るみへ」にみられた夫婦間の葛藤を経たものの言葉であることは言うまでもない。そして、こ

これらの言葉にみられるのは、自分の生のありようを変化と矛盾の中に置くこと、また、そうすることによって新しいものを生み出そうとする姿勢である。

木俣修は、この小説について、「総じて晶子の小説は本格的な小説というものには程遠いものであるということが言われるのではないかと思う。従って、その諸作品は近代小説史の中においては一つの位置を持つまでには至っていない。また自然主義的な手法を用いたといっても、その自然主義的なすさまじいまでの現実暴露を目途しているものでもない」（『解説』『定本与謝野晶子全集』第11巻 1980・1）と述べているが、自然主義者のいう現実暴露がなされているかどうかはこの小説の評価の基準とはならない。その点注目されるのは、作中の真鍋久子にあてた京子の次のような言葉である。

考へて見ますと、自分の詠んで居る歌なんかも大抵は此日記のやうなものです。天才のする生活を夢想して其れを自分の生活のやうにして弾奏して居るんです。世間で自分の歌を耽美主義だとか理想主義だとか云つて批難して居るやうですが、実際それに違ひない。（中略）私は凡人に違ひないかも知れない。併し唯の凡人ではない、天才を夢見て居る凡人である。自分を偽らずに書けば此二重の生活が何うしても歌になつて出る。最も現実主義的で最も理想主義、なんという痛ましい心内の格闘でせう。

晶子自身の浪漫主義の性格を端的に表明した文章だが、こうした「最も現実主義的で最も理想主義」であるという姿勢は、『明るみへ』という作品自体に貫かれている。単なる事実の記載報告ではなく、木俣のいうように「現実暴露を目途としているものではない」。

「明るみへ」という作品は、大正期、評論家として歌人として活躍する晶子が、その跳躍点として、この時期の晶子自身の生き方及び寛との関係をとらえなおそうとした作品である。晶子の第二評論集『雑記帳』（大4・5）にある『「一隅より」の時に比べて自分の思想に多大の変化のあつたことは此書が語つて居ります』という言葉は、「明るみへ」についても言える言葉であり、明治四十四年前後の夫婦間の相剋と晶子自身の欧州体験はそうした視座を獲得することを可能にしたのだった。

(了)

## 《注》

1 「著者の和歌に比すれば到底及びも付かぬもの」（『新刊紹介』『ホトトギス』明45・7）

2 『現代小説作法』（昭47・11 レグルス文庫、ただし初出は『文学界』昭33（34年）。大岡はここでサマセット・モームの『世界の十大小説』から次のような言葉を引用している。

小説の作者は、その物語る話を本当らしく考えるものにするために、話の筋に直接関係は持ちはするものの、それ自体はいっこうに面白くもおかしくもない一連の事実を物語らなければならない。また多くの場合、事件と事件とのあいだには、一定の時を経過させる必要があり、その場合作者は、作品全体の釣り合いをよくするために、できるだけ適当な事柄を挿入して、事件と事件のあいだの空隙をみたすようにしなければならない。こうした箇所は、普通「橋」という名で呼ばれていて、大抵の作者は止むを得ないことと観念してこの橋を渡り、しかも程度の差こそあれ、いずれも巧みに渡りおおせるのだが、残念なことに、その箇所にさしかかると、かならずといっていくらい退屈で面白くなってしまうのだ。

「明るみへ」という作品はこの「橋」という「罫」にどっぷりつかっているように思われる。

3 『与謝野寛短歌全集』（明治書院、昭8・2・26発行）の自作年譜に明治四十四年については次のように記載されている。

此春、麴町区中六番地に移居す。仏蘭西語を古屋鐵太郎君（当時東京帝国大学法科生）に学ぶ。此の初夏、晶子を伴ひ、水上滝太郎・佐藤春夫・万造寺齊外諸君と千葉市・銚子・香取等に吟行す。また此夏、晶子を伴ひ、水上滝太郎・江南文三・万造寺齊諸君と福島県の飯坂・東山両温泉に吟行す。十一月、郵船熱田丸に乗り欧州に遊学す。偶々満谷国四郎・柚木久太・長谷川昇・徳永柳洲・近江湖雄三諸君と船を同じくす。月末巴里に著く。この遊学中の通信を「東京朝日新聞」に掲ぐ。四女智子生る。晶子の第八歌集「春泥集」出づ。川合貞一先生と知る。

この自作年譜には多々誤りがあって、例えば、右にある麴町区中六番地に移転したのは前年の八月のことである。仮に寛の徳山行きを前年に求めてみたがみあたらない。この時期の徳山行きについてはまったく触れられていないのである。

ところで、「明るみへ」が明治四十四年以降の出来事の羅列ではなく、晶子の選択の目が働いていることは、二回に及ぶ吟行のことについてふれていないことからわかる。

4 山本藤枝『黄金の釘を打った人 歌人・与謝野晶子の生涯』（昭60・9）では「晶子が百首屏風その他の頒布を公表したのは七月だが、寛は寛で一足早く五月ごろ、渡欧資金あつめに京都、山口方面に出かけている」と述べ、その結果として、五月二十九日付の小林政治宛書簡を紹介している。

5 明治四十四年八月六日消印の小林政治宛に印刷された百首屏風頒布の案内は以下の通りである。

拝啓

いよいよよご清適のほど賀し上げまゐらせ候。さて唐突に候へども、此度良人の欧州留学の資を補ひ候ため、左の方法によ

り私の歌を白書せし百首屏風及び半折幅物を同好諸氏の間に相頒ち申し度く候間、御賛成の上加入なし下され候やう、特に御願ひ申上候。早々敬具

明治四十四年七月・

与謝野晶子

(傍点引用者)

6 山本藤枝、前掲書。

7 小沢については次の通りである。

二人は十三年前から知り合つて居た。京子が八阪の家へ来る一年程前に透の泊つてた宿で逢つたのが初めてである。京子は其時透に歌を見て貰ひに行つたのであるが、来て居た小沢も歌を詠んだ。死んだ母親が恋しいと云ふそんな歌であつた。小沢は其時船場の若旦那らしい扮装をして居たが、顔はどんな顔をした人か京子はよく見なかつた。外にも女が三四人居たので、小沢の方では殊更に京子一人が記憶に残つて居る理由はないが、其中で一番透の前から賞めて居た女として雑誌の発行人の小沢は少しの注意は京子に払つて居た。紫縞子と紅入友染の帯を紺緋の単衣の上に締た町娘の京子を、二度目に小沢の見たのはそれから二年目の夏で、京子は透と東京の場外れの渋谷に住んで居た。(中略)京子は今年の一月頃から或大部の本を小沢から頼まれて書いて居た。内気なやうで大胆な処のある性質を二人は同じやうに持つて居るが、殊に目隠しをした馬車馬のやうに、目的とする方だけを見て、見たくない方は右も左も見ないで済すことの出来る処が最もよく一致して居た。

一方、造型不足、説明不足も見られないではない。例えば、最初の場面、江南文三をモデルとする川崎と透とのやりとりの

中に、「珍な詩でも考へて居るかね」「先月の『金星』のは珍に見えますか」「大いに珍なものぢやないか」とある。「金星」は「スバル」のこと。ここに出てくる「珍な詩」とは「スバル」明治四十四年三月号に発表された「小曲四章」のことを指すのだろう。しかし、その「珍な詩」がいかなる内容のものであるかはわからない。また、この川崎の恋愛がどのような性質のもので彼が何に苦しんでいるのかも同じく「スバル」に掲載された「手紙」(明44・2)という作品を読まない限り理解できないといった具合である。つまり作中の出来事が、夫妻の周辺にはわかっていても純粹読者(?)にはわからないという事態が起こる。

8 今井泰子氏も『鏡心燈語』は、第三評論集以下の本格的な評論活動に移る前哨戦、晶子の人生の中仕切りであった」(『与謝野晶子の初期評論に関するノート』「日本文化研究」第三号、1991・3)と述べている。

9 ここで「京子」を三人称として描いていることに注目したい。視点人物がほとんど京子であるにもかかわらず、語り手が抑制をもって京子と同一化しまいとしていることが、この作品に一定の客観性をもたせている。そして、そうした描写で収め切れない晶子の生の声の部分は、手紙というかたちで表されているのである。稲垣達郎の先の評言も以上の意味でうべなうことができるし、「明るみへ」という作品の志向するものはこの三人称によって客観性を与えられているといつてよい。

10 この書簡は小説の執筆時点で創作されたものであろう。現在、晶子の書簡は岩野喜久代編『与謝野晶子書簡集』(昭23)及び、植田安子・逸見久美編『天眠文庫蔵与謝野寛晶子書簡集』(昭53)、杉本邦子・大塚豊子編『与謝野晶子未発表書簡』(平3)に見ることが出来るが、いずれも茅野蕭々、茅野雅子宛の書簡は収められていない。また、それらの手紙はほとんどが文語文で綴られており、「明るみへ」掲載の手紙のような口語文で書かれた手紙をみつけることは難しい。加えて、晶子の考えや思想を作中にあるように長文で綴ったものも無いに等しい。これは新聞掲載第三十六〜三十八回の久子宛の書簡についてもいえることである。また、文語文で綴られているとはいえ、十四〜十五回の春子宛の手紙も創作であると考えられる。



ただし、ここに付け加えておけば、明治四十四年十二月二十日付けの小林政治宛の書簡には「茅野様弱き方と強き方と極たんにある人と私を申候」とだけ書かれている。

11 正富汪洋『晶子の恋と詩』（昭42・10 『明治の青春―鉄幹をめぐる女性群―』昭30・9の改版）

